月曜評論

ソ連の中国研究

中嶋嶺雄

日本国内はロッキード事件で沸騰、中国では周恩来死後「走資派」批判が激化するさなか、こともあろうにウォーターゲート事件のニクソン前米大統領が破格の国家的歓迎を受けるなど、二月の新聞はさぞかし読みでがあったことと思う。幸か不幸か私はこの間、日本の新聞を読まなかったので、いささかピントがぼけているかもしれないが、去る二月八日から十九日まで、ソ連科学アカデミーの招待でモスクワに滞在し、帰途、テヘラン、ニューデリー、バンコク、香港、ソウルを飛び石訪問して、一昨日帰国したばかりである。

今回、私を招いてくれたソ連科学アカデミーの社会科学学術情報研究所は、一九七〇年に創立され、一昨年、モスクワ大学に近い郊外の一角に超近代的なビルを新設して移転した新しい研究機関であるが、社会科学の学術情報センターとしてはおそらく世界一の規模を誇るものであり、ソ連における社会科学各方面の総合資料センター・総合図書館をも兼ねている。このユニークな研究機関は、建物も完備した昨年から全面的な活動を開始し、私は今回、この研究所の最初の外国人招待者として単身招かれたのであった。

◇……◇

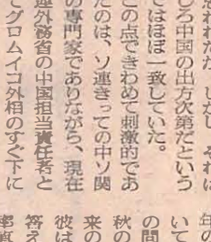
私が招かれたのは、一つにはいまやソ連にとって、現代中国学が社会科学の諸分野においても最重要部門になっているからであろう。つまり、哲学、歴史学、経済学、政治学、国際関係論、社会学などの各学問分野において中国研究がおこなわれているというよりは、現代中国学がこれらの学問分野を貫く学際的な共通項としてクローズアップされつつあるのである。それは、深刻な中ソ対立に直面しているソ連にとっての国家的な要請であることは疑いないけれども、一方、永い歴史と伝統を有するソヴェト東洋学が、現在中国研究にかんする幾多の試行錯誤ののちに、いままさに現代中国学として開花しはじめたのだともいえるのである。

だから、このような状況に対応して、わが国では考えられないようなシステマチックな研究機関がまたたくまに誕生したのである。そして右の学術情報研究所は、伝統ある東洋学術研究所、現代の問題を中心とする極東研究所と並んで、中国研究のもう一つのセンターになっており、むしろ現状分析的な中国研究の中心になっているといってもよい。

ところで、今回、改めて感じたことは、ソ連の研究者が日本の中国研究や中国情報をきわめて重視していることであった。邦語訳もある学刊誌「極東の諸問題」などは、しばしば私の著書や論文にふれているので大体想像してはいたが、私のモスクワ滞在中、エスコート役をつとめてくれた女性研究者は即座に私の著書のことを語りはじめたし、右に紹介した科学アカデミーの三つの研究所の図書室には私の図書が何冊もそろっていた。また私の論文のダイジェストがロシア語訳されてファイルされていたのにも驚かされた。

◇……◇

このような事情であるうえに、たまたま中国問題がホットなテーマになっていたから、モスクワ滞在中のスケジュールはきわめてタイトな（つまった）ものであり、講演、意見交換、座談会などに追われて二週間を過ごしたのである。もとより、いかにソ連の学者が私の研究に関心を示していたとしても、いつも同じ意見であろうはずはない。第一、科学アカデミーの研究者のなかにも、依然としてスターリン時代の古きよき時代＝五〇年代の中ソ友好時代を懐古しているのであるが、だからといって再びそのような時代がくると考えている者は一人もない。今日の中ソ対立は、すでに現代史の内部にビルト・イン（作りつけ）された歴史的過程であり、ある朝目が覚めたら中ソがかつてのような一枚岩の団結に戻っていたなどということはもはやありえないことを様々な問題から改めて確認せざるを得なかった。



テレオタイプ（紋切り型）の議論をふりまわす者、すべてにソ連が正しく中国が悪いといわんばかりの者もかなり多い。そのようなときには、大論争を展開したが、しかし、ソ連の学者の態度でリアルに問題を考えようとする人びとがかなり増えてきていることも事実である。

そのような人びとは一様にかつての古きよき時代＝五〇年代の中ソ友好時代を懐古しているのであるが、だからといって再びそのような時代がくると考えている者は一人もない。今日の中ソ対立は、すでに現代史の内部にビルト・イン（作りつけ）された歴史的過程であり、ある朝目が覚めたら中ソがかつてのような一枚岩の団結に戻っていたなどということはもはやありえないことを様々な問題から改めて確認せざるを得なかった。

この点は、毛沢東以後の中国にかんしても基本的には変わらないというのが、ソ連の学者の大方の見方であった。ソ連の学者は、ソ連の党、政府当局ほどには、毛沢東以後の中国との和解の可能性を期待していないように思われたが、しかし、それはむしろ中国の出方次第だという点ではほぼ一致していた。

この点できわめて刺激的であったのは、ソ連きっての中ソ関係の専門家でありながら、現在ソ連外務省の中国担当責任者として働くカーピツァ極東第一部長との三時間にわたる討論だった。カリーニン通りのレストラン・プラハでの一夜、議論がはずんだところで私が、「中ソ友好同盟条約は一九八〇年四月で三〇年の満期になる。だが条項によると二年まえの七九年四月にどちらかが意思表示しないかぎり、自動延長になる。この条約をどうするつもりか」と問いたしたのに対し、彼は「内容の改定はあり得る」と答えて、この条約を廃棄するとは決していなかった。「内容の改定があり得る」のなら、「ここ二、三年のうちに中国とこの条約についての交渉をもつつもりか」との問いには、かつて一九六九年秋の歴史的なコスイギン＝周恩来の北京空港会談にも同席した彼は、「それは相手次第だ」と答えて笑っていた。このような率直な対話ができたのも、カーピツァ極東第一部長が『中ソ関係史』ほかの著作をもつモスクワ大学教授でもあるという、学者同士の気のおけなさからであったにちがいない。

（東京外語大助教授）

大会のスローガンには、こうし「する」と決意を述べた。

た国民的諸要求のほか「ロッキー」社会、共産、公明の各代表は、

ンプレで、かつてない危機に陥り予算案を押しつけてきている。さ

り、生活防衛と国民本位の不況対策にもロッキード汚職をめぐって問